新潟青陵大学大学院
臨床心理学研究　2010.vol.4　25～32

風景構成法を介した高齢者とのかかわり
―特別養護老人ホームでの事例から―

浅田　剛正、運上　司子、椎谷杏紀子、中村　規子、
佐藤　美希、橋田　　望、齋藤　恵美

新潟青陵大学大学院

キーワード：高齢者　かかわり　風景構成法

Participation in the aged person mediated by Landscape Montage Technique
—From cases at special nursing home for the aged—

Takamasa ASADA, Shisako UNJO, Akiko SHIIYA, Noriko NAKAMURA,
Miki SATO, Nozomi HASHIDA, Megumi SAITO

Graduate School of Niigata Seiryo University

Key words：Aged person, Participation, Landscape Montage Technique

Ⅰ．問題と目的

近年、高齢者への援助に関する諸課題は社会的にますます着目されてきており、中でも心理臨床的なパラダイムとしては、回想法などを中心とした心理的援助可能性にも期待が寄せられている。高齢者援助に関する近年の研究においては、認知症の予防および改善、もしくは心身の機能的な維持・改善といった治療（cure）的観点からの研究が数多くなされている一方で、「老い」を抱える高齢者自身の心理的テーマや心の内面の表現など、その個人の在り方を理解し、支えてゆく（care）観点もまた着目されるべきであると考えられる。

岡田（2006）は「箱庭を介したかかわり」をテーマとして、調査者が特別養護老人ホームに訪問して箱庭セッションを個別の施行において、箱庭作品の内容だけでなく、箱庭というツールを用いた「かかわり」のプロセスについて検討している。施設内での継続的な箱庭制作過程からは、高齢者とのかかわりに関して「セッティングについて」、「施設との関わり」、「継続」といった従来の箱庭療法の個人内過程に留まらない固有のテーマが明らかにされ、表現媒体としての箱庭を通じて、高齢者が施設スタッフにも見せる機会のない自身の生きる世界観を、限られた「かかわり」の中に表現することへの心理臨床的な可能性が示唆されている。特に高齢者にとっての人との「かかわり」の中には、身体的機能の低下とは異なる次元、すなわち心やイメージ、もしくは自らの人生をどのように捉え、それを語るのか、といったテーマが潜在していると考えられるのである。

それに対して本研究では、箱庭に対応する「かかわり」のツールとして、風景構成法の導入を試みる。風景構成法（以下、LMT）とは、白紙の画用紙またはケント紙に見守り手が枠を付け、川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石の10個のアイテムと付け足したいものを順にサインペンで素描して全部で一つの風景を描き、その後クレヨンで彩色する方法である。箱庭と異なる点として、セッティングの簡便さや、「絵を描く」ということに対する描き手の技術的な抵抗感、身体的制約の影響の強さ等が予想されるが、 LMTが箱庭療法をその発想の起源として持つ（中井，1894）ことからも、描き手と見守り手の関係性を強く反映させ、「かかわり」の媒介として機能する点に関しては箱庭と共通した点がある

のではないかと思われる。

すでに水谷（2004）は、98名の高齢者に風景構成法を施行し、作品がワーキングメモリー等の認知機能低下によって受ける影響について報告しているが、その中で「要素の重なり、構成要素の配置のまずさや構成の破綻が見られたとしても、それなりのレベルで、風景構成法を通してのやり取りは可能であり、風景構成法を高齢者に行なってもらうことについて、筆者は良い感触をもっている。」と述べている。皆藤（2004）がLMTの実施を逡巡するクライエントについて、「そのためらいそれ自体が風景構成法」と述べるように、２者関係の中にLMTが持ち込まれたときに描き手が示す対応それ自体を詳細に検討することで、高齢者との「かかわり」についての重要な示唆が得られるのではないだろうか。

以上を踏まえ、高齢者とのかかわりにおいて風景構成法が果たす役割、およびその中に生じてくる心理的諸現象、高齢者の抱える心理臨床的テーマや表現に関する基礎的資料を得ることを目的とした以下の調査を行なった。本稿ではその中から特徴的な３事例を報告し、考察する。

Ⅱ．調査方法

近隣の特別養護老人ホーム（S施設）に協力を依頼し、筆者を含む臨床心理士２名および臨床心理学専攻大学院生４名、S施設職員２名（臨床心理士、作業療法士）で調査チームを構成し、集団法および個別法による高齢者へのLMTの施行を行った。

【集団法での施行】

施設利用者のうち希望者15名（男性３名、女性13名、平均年齢88.3才（SD 5.5））に対して集団法でLMTを施行した。隣り合った席の描き手相互で枠付けを行い、耳の不自由な描き手や素描するペースの違いを補完するために、呈示するアイテムを順に大きくホワイトボードに記すようにした。また、筆者と施設職員を含めた４名が見守り手として臨席した。

【個別法での施行】

集団法での結果を基に、調査チーム内で普段の施設内での様子などを加味して協議し、以下のような個別セッションを施行することとなった。

集団法での様子を踏まえ、個別法での施行が可能と判断された利用者のうち７名（83歳～99歳、平均年齢91.7歳、男性１名、女性６名）を対象に、およそ月１回のペースで３セッションのLMTを施行することとした。描き手毎に決まった担当の見守り手が居住スペースを訪問し、時間を昼食前の最大75分として定め、描き手の個室内でLMTセッションを行なった。必ずしも描画ができなくともよいが、可能な限りLMTの標準的な手順に従って施行することとした。

Ⅲ．結果と考察

集団法では、開始時から技術的な自信のなさを表明する描き手が多く、〈川〉の素描までに20分以上を要したが、〈川〉以降は概ね個々のペースで自発的に進められるようになった。結果的には１時間の予定時間を30分ほど超過しても積極的に描き続ける方もいた。

実施した事例のうち、集団法から個別法３回を経た３事例について以下に報告する。なお、Xさんには男性、Yさん、Zさんには女性の見守り手がそれぞれ担当した。描き手の言葉は「　」、見守り手の言葉や呈示したアイテムは〈　〉として示した。

Xさん（99歳女性）の事例

集団法（写真１-１）：

見守り手や周囲の人に、「こう描いてみようか？」などと確認をされながら、しかし自身でも発案しながら描いていた。川を描くときには「①川」、山には「②」、田には「タンボ」と端に字で小さく記す。道を描く際にすでに描いた川を指して「道はある」と言っておられたので、＜これは「川」と言っておられましたよ＞と声を掛けると、自ら自身の混交を修正して、「じゃあ、川の脇に道を描いたらいいかね。」と改めて道を描く。その際にも、「道」と字で記載。家、木についても字で記す。素描の段階で、表面に自身の名前（写真では削除してある）も書かれる。彩色の後に裏に記名した後、しばらくして、「これは誰が描かれた絵ですか？」と見守り手に尋ね、表面に書いた名前を再度確認し、納得された。

＃１（写真１-２）：

「難しいねぇ」と言われながらも、すんなりと描き始める。描いた〈川〉から「A川」を連想され、その後、〈道〉は「B街道」ということになって字で記入する（写真では記載を消してある）。昔、B街道をよく歩いていたという話から、他の後半のアイテム

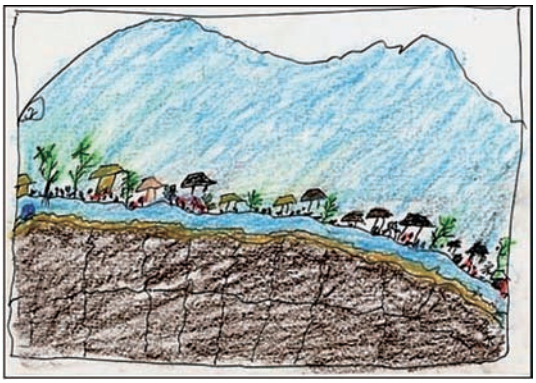

写真１-１．Xさん集団法のLMT

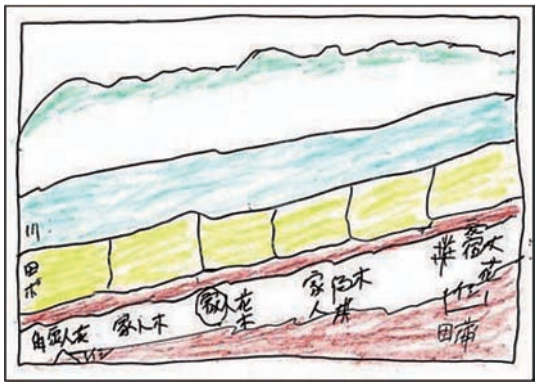

写真１-２．Xさん＃１（個別法）のLMT

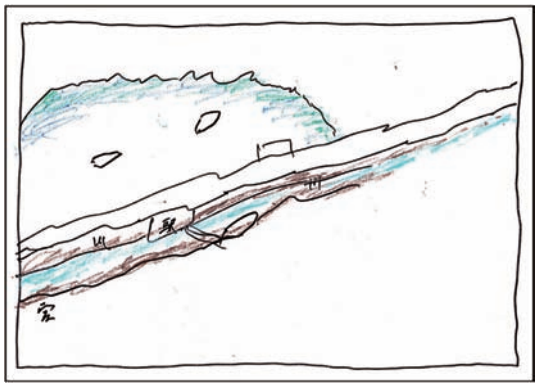

写真１-３．Xさん＃２（個別法）のLMT

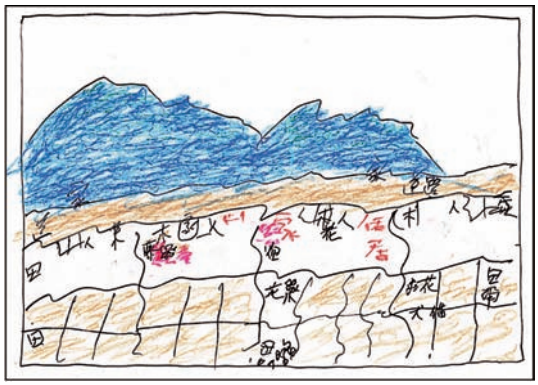

写真１-４．Xさん＃３（個別法）のLMT

は“絵を描く”というよりも描き手に対して“図示して教える”ように、漢字を用いて通りと家の配置などを表すようになる。〈家〉が並ぶ中には「宿」もある。一通り完成した後で、できた風景を眺めながら、山はC山であり、「中腹にいい温泉があるよ」と見守り手に教える。家の裏手には田んぼがあり、よくその田んぼを抜けて山に遊びに行ったこと、馬車に乗って行ったこともある、と楽しそうに話されていた。B街道、C山共に他県にあり、Xさんの結婚前に住んでいた場所であることが推測された。

＃２（写真１-３）：

「絵なんか描けないよ。」と言いながらも、ご自身で車いすを机に寄せて描く準備をされる。〈川〉と〈山〉を描いた時点で、山がC山であること、昔結婚する前の1年間を麓の小学校で勤務していたという話をされる。山の中腹にある有名人の別荘のことなどを話す際はどこか誇らしげであり、〈田〉以降は絵そっちのけで、勤務していた小学校のこと、その土地の祭の活気あふれる様子などの話になる。「ちょうど今頃やっているはずだね。来月は祭のメインイベントがあるから、是非見に行くといいよ。」と見守り手に勧める。

＃３（写真１-４）：

前回に比べるとどこか気乗りがしていないような印象であったが、机に向かっていただける。これまでと同様、〈家〉以降は漢字で示すが、家を示す区画を四角で区切ったり追加することで“二戸一”であることを示したり、〈田〉だけでなく「畑」を加えたりと、細かな一工夫が見られた。今回も、出来上がった絵を眺めながら、どこか懐かしそうにC山の話を見守り手にされる。C山の中腹の温泉宿でよくテニスをした、という話の際はとても活き活きとしていた。

XさんのLMTを介したかかわりについて

Xさんにとって、「風景」と言えば嫁入り前の自分にとってのC山を望む光景が繰り返し思い起こされるようであった。３回を通じて、〈山〉は必ずXさんのこれまでの生活に刻み込まれた具体的なイメージと重なり、具体的な思い出にまつわる多様な連想につながっていったと言える。

XさんのLMT描画に特徴的であったのは、描画の中に小さく字を付されるという点である。集団法の段階からも見られたこの特徴は、認知症の症状のた

め記憶が長続きしないことを自身で補うための方略であると同時に、描画が作品として完成させられるものでなく他者に伝えるためのツールとして捉えられているということが推測される。

そういった面で、集団法で描かれたLMTに比べて、個別で施行したLMTが絵としての完成度を減じていっているように見えるが、それは綺麗な作品を仕上げるよりも、自身の思い出や自分が見た風景を目の前に居る見守り手に伝えることにより重点を置いて描かれるようになったプロセスとしても考えられる。つまり、文字で描かれた〈家〉、〈木〉、〈人〉、〈花〉、などは、絵画としての巧さや再現性などに拘らず、目の前の見守り手に自身のイメージを伝えるための必要十分な表現の仕方を選択しているとも言え、LMTの各セッションの意味を見守り手とのコミュニケーションに特化していく過程として捉えられないだろうか。事実、見守り手にはC山を望む光景がとてもよく伝わってきたのであった。また、このことから、それぞれの漢字が象形文字を起源とすることを改めて思い知らされるようでもある。特に〈木〉などには、字とも画ともつかない中間的な表現がいくつか見られる。

Y さん（83 歳女性）の事例

集団法（写真２-１）：

〈川〉、〈山〉、〈田〉までを個別に描き、〈道〉以降はそれぞれを関連させた構成で描くが、終盤になって道が川になっている。プロセスとは別に、再度山を３つ（左上）描き足しており、見守り手がそのことに触れると、それぞれの山の高さの違いを再現していることを説明してくれる。

＃１（写真２-２）：

絵を描くようお願いすると「私、絵は下手ですよ。」と言うが描いて下さる。左端から１つずつ順番に描いていく。〈動物〉と〈石〉だけは、「わからない、描けないわ。」と描かれなかった。彩色段階では、左端から順に「これは何でしたかね？」〈それは川です。〉と確認しながら彩色。何色かある茶色をどれにするか迷う等、色選びにはこだわりがあるようだった。出来上がった絵を２人で眺めると、各アイテムから話が広がり子どもの頃の遊びの話、家の手伝いで汽車に良く乗った話を語る。描画の際は表情にやや固さも見られたが、話す際には楽しそうな生き生きとした表情で語られる。

＃２（写真２-３）：

風景の絵を描いて欲しいとお願いすると、「難しいわ。」と、アイテムの横に縦線を描き加え、「これでひとつの風景ということにして下さい。」とそれ以降、アイテム間に縦線が引かれるようになる。「人は大きく描いたほうがいいわね。」と全体像を描く。今回も〈動物〉と〈石〉は描かれない。動物について、「私、おっかながりだから動物には触れないの。そういうの駄目？」

彩色段階でも左から順番に塗る。〈田〉や〈道〉等、「これは何でした？」といくつか確認しながら彩色。人間は髪の毛の色を「黒って言うのもねえ」と言って茶色を選び、肌の色までしっかりと塗っていた。出来上がった絵を眺めながら「この緑がいいわよね。」とやはり色選びにこだわりを見せる。〈人〉を見て、昔洋裁学校に通っていたという話をして下さった。終わりに一月後また伺うと話すとカレンダーに印をつける。

＃３（写真２-４）：

部屋に伺うと、机にカーネーションと缶コーヒーが置いてある。絵を描く事をお願いすると、「私絵が下手だから」と恐縮する。今回も縦線で仕切りながらアイテムをひとつずつ描いていく。〈動物〉は、描こうとされたがため息をついて「描けないわ。」と、〈石〉も描かれない。彩色段階ではクレヨンを見て「綺麗ねぇ」と言い、アイテムを確認しながら彩色。茶色をどの色にしようか迷っていた。出来た絵を眺め、「恥ずかしい。絵は嫌い。」と話す。そして「あなたここに描いて。」と言われ、別紙に２人で別の絵（写真２-５）を描き、色を塗る。Yさんはいくつもチューリップの絵を描かれていた。見守り手が海の絵を描くと、昔海の近くに住んでいたという話をする。置いてあった缶コーヒーを見守り手にあげると言う。

写真２-１．Yさん集団法のLMT

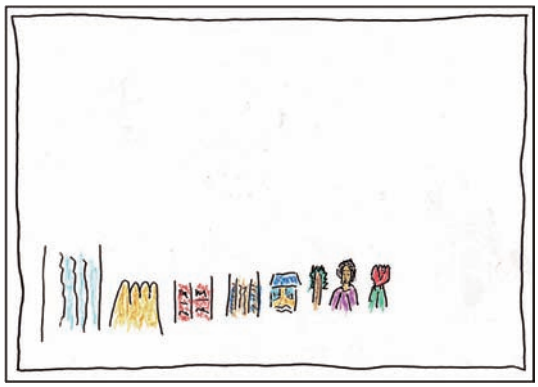

写真２-２．Ｙさん＃１（個別法）のLMT

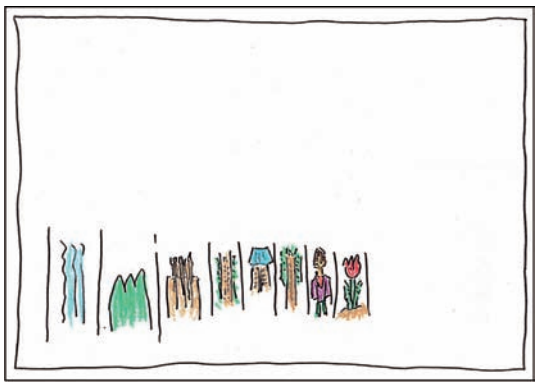

写真２-３．Ｙさん＃２（個別法）のLMT

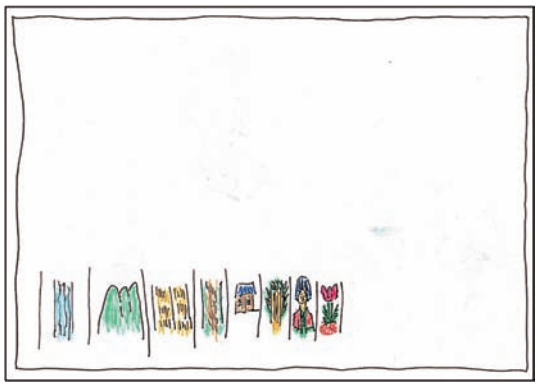

写真２-４．Ｙさん＃３（個別法）のLMT

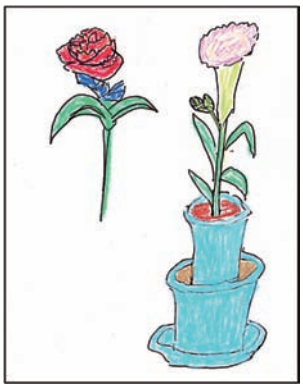

写真２-５．Ｙさん＃３（個別法）での描画

Ｙさんの LMT を介したかかわりについて

Ｘさんと同じく、Ｙさんにおいても集団法から個別法になることで、アイテム間の構成がされないという点で作品としての完成度は減じているように見える。ただし、個別法の3枚においては、小さく描かれた絵から同様に窮屈そうな印象も受けるものの、詳細に見ていくとそれぞれに変化がある。同じアイテムでも異なった表現形式が工夫され、また経過からも見て取れるように、その都度色を慎重に選び、一つずつのアイテムに対してなされた創意工夫が見てとれるであろう。

そういった表現形態は自分の中だけで小さな変化を遊び、楽しんでいるようでもある。自身の工夫を不特定の他者に明示する必要はなく、自分の中だけでそっと楽しめるものであり、ご自身の中にたくさんの充実した思い出を持っている方であることが、描画からも伺える。また、それは各アイテムから次々と連想や思い出を語り、＃３に見られるような、自由な創作を二者関係の中で楽しむことができるまでの関係形成につながっていると考えられる。

Ｚさん（95 歳男性）の事例

集団法（写真３-１）：

アイテムを一つずつ個別に丁寧に描いていた。全体的にばらばらではあるが、田と道にはアイテム間の繋がりが感じられる。また、〈道〉を提示した際にすでに道の間の小さな家を描いていたが、順番に描く、という教示を優先し、改めて別の〈家〉を描いた。マイペースだが丁寧に描いていることが印象的である。〈人〉では描く前に考え込んでいたので〈描きにくいものは描かなくていいですよ。〉と声をかけたにも関わらず、他の参加者が花以降に進んでも人をじっくり描き進めており、その後、順番通りに〈花〉、〈動物〉、〈石〉をしっかりと描いておられた。木や家など全てに渡って繊細な色遣いが特徴的であり、律義な中に感情的な繊細さを併せ持つような人物であることが推測された。また、職員の情報によると『同施設に入居している妻の世話を献身的にする優しい愛妻家で、他人の言うことは一切聞かない。』とのことであった。

＃１（写真３-２）：

挨拶には硬い表情で応じる。聴力が弱いことを配慮し、手持ちのホワイトボードで見守り手の名前を書き示すと、名前を繰り返し、不思議そうな顔で見

守り手を見る。描画に入ると、「10コ？」と項目の数を確認し時々数えて確認する。また、「うーん、人間は駄目だー。」、「これ、花でないなー」等とつぶやき、「ふふふ。幼稚園に入る前みたいだ。」と笑う。全般的には自分のペースでこつこつと描画に向かう。特に「馬」は鬣や蹄を描き加えてゆっくりと丁寧に描く。花や〈人〉の赤いリボンが印象的。家と田をつなぐ青色の〈道〉については、「これは道なんだ。間違えた。」と述べる。終了すると、背中を伸ばし、表情に最初の硬さが戻る。

＃２（写真３-３）：

用紙を差し出すと机上の物を除ける。描画は「どこにしようかなー。（少し鼻歌）」、「人は難しい…。」、「うまく描けないなー、ダメだー。（声をあげて大笑いする）」、「木には赤い花が、家は２階にすればよかった」等のつぶやきや発声があり、自嘲的なトーンでありながら、描画を楽しんでいる風でもある。Additionで碁盤と碁石を描き足した後、紙の碁盤と白石をごそごそと取り出して「碁盤は家に置いてきた。せがれが来た時にはやるんだけども。この間は連勝だった。相手がいなくてねー！いたんだけど頭がやられてね」と楽しそうに語る。〈馬が人と一緒ね〉と指摘すると、「家が農家だったから。いつも馬と一緒に仕事していた」と教えてくれる。最後に「また来ます」と挨拶をすると「ありがとうございました」とお辞儀をされる。かなり柔らかくなった印象を受ける。見守り手は枠を描くのを失念していた。

＃３（写真３-４）：

このセッション前に、これまで妻の世話をひたすら献身的に行ってきたZさんが、他の入居者女性とも交友関係を持つようになってきたことが、職員からの情報で明らかになった。

セッションでは、「私を覚えている？」と聞くと「違うみたいだね。」と笑顔で答える。「絵」とボードに書くとすぐＴＶや本を除けて場所を作る。描画中は笑ったり、つぶやいたり、＃１、＃２と同様である。顔つきや姿勢や仕草がマイペースで楽しく動いている。〈道〉と〈家〉を描いた後に、家から道に向かうような小道を描き足す。その他のアイテムを見ても、道を中心として繋がりを持った風景が構成されつつある印象を受ける。また、「馬」が「駆け出しているような犬」に変わっている。最後は柔らかい笑顔で「ありがとうございました」とお辞儀をされる。

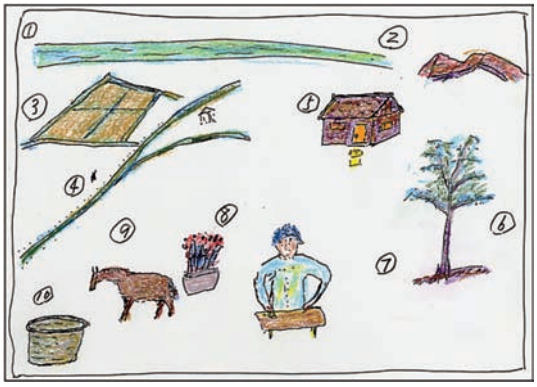

写真３-１．Zさん集団法のLMT

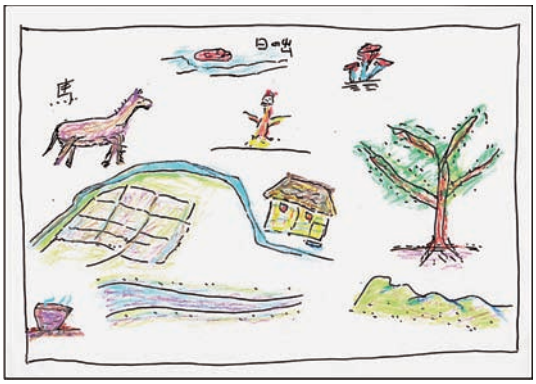

写真３-２．Zさん＃１（個別法）のLMT

写真３-３．Zさん＃２（個別法）のLMT

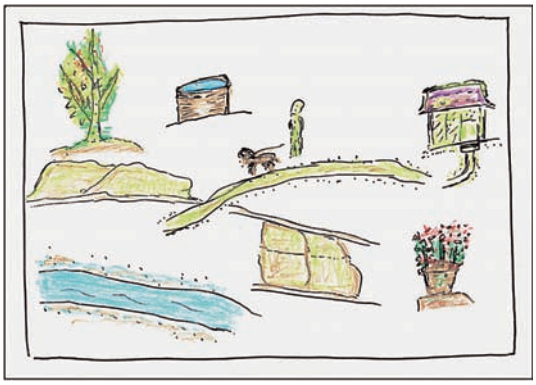

写真３-４．Zさん＃３（個別法）のLMT

Z さんの LMT を介したかかわりについて

集団法においては、一言も言葉を発することなく、マイペースに淡々と課題をこなしていたZさんであったが、個別法においては、３回の描画と態度に温かい情緒と力強い生活エネルギーがよみがえっているようである。

４枚の描画を通じて、ばらばらに描かれているように見えるアイテムの中で〈道〉と〈家〉と〈田〉は常に関係をもって描かれていることが特徴的であろう。その変化を追っていくと、集団法において控えめに示されたそのつながりが、＃３に至るまでに明確に関連付けられていくプロセスが見て取れる。また、〈動物〉と〈人〉との関係も、それらが徐々につながりを持ち、「馬」は最後には飼われた「犬」となって家から続く道に配置されるようになっていることも興味深い。

これらの描画の変化は、集団法の〈人〉に表現されているような実直で立派な男性イメージが、溌剌とした少年像が〈道〉を通って家と外界を行き来しているようなイメージへと、徐々に変容し収斂してきている過程とも考えられるのではないだろうか。さらに言えば、＃３で明らかになった施設内での人間関係の変容と共に、〈動物〉や〈川〉が象徴する衝動性に対する〈人〉によるコントロールおよび〈道〉による構造化の表現として、社会的に統制された男性的な心性がLMTに布置されてきているとも言えよう。このことは＃２において枠が失念されることにも表れている女性の見守り手との情緒的なコミットメントによって抱えられていたのである。

Ⅳ．総合考察

風景構成法が果たした役割

XさんのLMTにおいては、60年以上前のXさんが取り囲まれていたC山麓の情景が見守り手とのコミュニケーションでの中心テーマとして明確になり、それは調査後の家族への報告会において、Xさんのご家族にもあまり語られない結婚前の大切な思い出であったことが明らかとなった。また、Yさんにおいては、羅列的な表現形態へのパターン化と、個々のアイテムの中に込められた豊かな連想と情緒的な色彩への拘りに、普段周囲との交流を積極的に持たず、ご自身の趣味を楽しまれることが多いというYさん本来の人となりが率直に表現されている。さらに、ZさんのLMTに表現された“家から動物を連れて外出する”というテーマは、妻の入居する特別養護老人ホームという家と社会が密接に重なる場で、Zさんなりの心理的構造化を模索する過程が表されているようにも考えられる。

LMTを通じて過去を連想して語るというこういった形態には、高齢者への回想法と共通する点もあろう。黒川（2005）は痴呆性疾患に対する回想法の効果について、HDS-Rなどの評価尺度における数値の変化は認められないものの、そういった尺度上で測定されない側面の変化の可能性、特に「抑うつ感」をはじめとした情緒的側面への効果を指摘している。そして、その効果をひきおこすまでのメカニズムについて、感覚刺激から手続き記憶が想起され、さらに意味記憶の想起、エピソード記憶の想起に繋がり、そのエピソードにまつわる情動の再体験がなされると推定している。しかし、例えばXさんのLMTセッションでの表現において、前回の描画の内容については憶えていないにも関わらず繰り返された「C山」の情景とそこにまつわる様々な語りなどを示すのに、「想起」という用語では必ずしも適切ではないようにも思われる。むしろ、繰り返される一貫性をもった「創作」において、Xさんの個人的なテーマが見守り手との関係の中で収斂し明らかになってきたと捉えるべきではないだろうか。

個別法でのLMTセッションでは、明らかに集団法での施行とは異なる表現がなされ、概ね退行的かつ描き手と見守り手との関係性に応じた自由な表現やかかわりが広がってゆく傾向が見られた。LMTにおける「風景」という舞台においては、高齢者にとって昔から身近なアイテムが過去の実体験やイメージが賦活され、描画の中で「風景」というモノを再現するというより、各アイテムの提示を媒介（きっかけ）として描き手－見守り手間の直接の「物語」の展開が促進されてゆく。その非現実的な場で展開されるプロセスの中でこそ、高齢者の個別性が再生産Re-creationされていく可能性が開かれるのではないだろうか。

高齢者と風景構成法

Xさん、Yさんの集団法、Zさんの＃１にみられるように、「川と道との取り違え（山中，1996）」が多いことも高齢者のLMTにおける特徴であろう。山中によるとこの現象は意識と無意識の反転現象を象徴するとされるが、本事例においても単にエピソード記憶の保持の難しさと解するだけではなく、高齢者

の無意識に対する意識の近接したあり方を特徴付けるとも言える。また本調査において、普段のレクリエーションになかなか参加されないような利用者が参加されるということもあった上に、普段接している施設職員の予想以上に描画が可能であったことも印象的であった。セッション冒頭に技術的な抵抗感を訴えるものの、施行が始まれば非常に熱心に取り組まれるのである。このようなコミットメントの深まり方は、若年者に比べると異なる傾向を示しているように思われる。

これらの傾向は、若年者の場合は風景を一つの客体的な離れた概念として捉えることが多いのに対して、高齢者は風景および提示される各アイテムに自分自身にとっての「山」や「馬」などを重ねて捉えやすい傾向があることを示しているのではないかと推測される。つまり、若年者に比べて高齢者の場合、「風景」と「私」との親和性が高く、風景が「私の風景」として表現されやすいのである。それは同時に、自我境界の脆弱性が背景にあるとも言えるであろう。このことが、事例に見られるようなかかわりの上で、やや退行促進的な作用をもたらしているのだとも考えられよう。

大山（2009）は風景に出会った際に私たちに生じる「風土性」に着目し、日常では俯瞰的に捉えることができない大景群（川、山、田、道）を描き手自身が距離をとって眺めるという行為の内に、Lacan,J.の鏡像段階と同じ機制が見出されると指摘している。すなわち、LMTを描くことによって、「私と世界との関係が自覚的に捉えられ、私は世界の中に位置づけられる」という人間のコスモロジーの成立への深い関連が見出されるというのである。エリクソン,E.H.が挙げた老年期に抱える「統合 対 絶望」というテーマを鑑みても、「私」が「私の風景」を描くという行為において高齢者自らのコスモロジーに触れる営みが為されるとすれば、“風景構成法の場”には高齢者自身が自らの生きてきた人生との「かかわり」に取り組むための守られた場を提供するという、本法に特徴的な高齢者との親和性が示唆されるのである。

こういった退行的な現象とそれを賦活するLMTという場は、機能的な低下傾向を抱える高齢者においても、描き手がその都度新たに連想を紡ぎ創作するという創造的な営み（その都度の再生産）を可能にし、それは皆藤（1996）が述べる「心理療法における関係性や風景構成法における「やりとり」のプロセスには、クライエントと心理療法家双方にとって「意味が付与される世界」の現出がある」という指摘を高齢者においても裏付ける「ごく当たり前の帰結」である。ただし、本稿で示した高齢者への風景構成法の事例からは、さらに、その意識の不安定さ（自我境界の脆弱性）を露わにする危険性を持つことと同時に、高齢者自身の「私」の一貫性もしくは主体性を再形成していく可能性を開くものでもあることも示唆しているのではないだろうか。また、岡田（2006）の場合と同様に、これらの現象が初めて出会う他者との間のわずか４セッションにおいて生じてきたことにも、高齢者を抱える多忙な施設において、利用者の「個」に沿った援助を行う上での実践的意義が見出されると思われる。

謝辞：本研究を行うにあたり、協力いただいたS施設利用者およびご家族、職員の皆さまに心より感謝申し上げます。なお、本研究は新潟青陵大学大学院学内共同研究費の助成を受けて行なわれております。

Ⅴ．引用文献

皆藤章（1996）：心理療法と風景構成法、『風景構成法その後の発展』（山中康裕編著）、岩崎学術出版社、pp.57-58.

皆藤章（2004）：『風景構成法のときと語り』、誠信書房.

黒川由紀子（2005）：痴呆性疾患の高齢者に対する回想法の有効性、『回想法―高齢者の心理療法』、誠信書房、pp.93-94.

水谷みゆき（2004）：高齢者の風景構成法の基礎にある空間と構成要素の生成について―高齢者の風景構成法における奥行き表現の持つ意味について（第２報）―、『日本芸術療法学会誌』35（1,2）、pp31-42.

中井久夫（1984）：風景構成法と私、『H・NAKAI風景構成法』、岩崎学術出版社、pp261-271.

岡田康伸（2006）：高齢者への心理臨床的かかわりに関する研究―箱庭を介したかかわりから―、平成16・17年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書.

大山泰宏（2009）：文化の観点からみた風景構成法、『現代のエスプリ』505、ぎょうせい、pp32-43.

山中康弘（1996）：風景構成法に関する二、三の興味ある知見、『風景構成法その後の発展』（山中康裕編著）、岩崎学術出版社、pp.335-339.